

学 位 論 文 要 旨

氏 名 賀 屋 育 子

題 目 児童期における他律的セルフ・エスティームに関する研究
——概念，測定法，教育方法の観点から——

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

セルフ・エスティーム（self-esteem：SE）は、「自尊感情」や「自己肯定感」の訳語で知られ、人の健康・適応を高める役割をもつ心的特性として心理学を中心とする多数の研究領域で重要視されてきた。また、研究領域だけでなく、社会的にも生産性を上げる要因の1つとして注目度の高い概念であろう。

学校教育に目を向けると、SEは高めるべき心的特性として重要視され、小学校教育においてもSEを育成する試みが行われている。一方、SEが人の健康・適応に及ぼす効用は賛否両論が主張されており、適応的側面と不適応的側面を弁別する研究が展開されている。近年では、山崎他（2017）によって概念と測定方法の両観点から精緻化が試みられている。ここでは、適応的側面を自律的SE、不適応的側面を他律的SEとして概念提起が行われ、研究が進められている。

SEの適応的側面である自律的SEを育成する教育として、「自己信頼心（自信）の育成」プログラムがある。この教育は、TOP SELF（Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship）と呼ばれる学校予防教育プログラムの1つであり、横嶋他（2017）によって効果検証が行われている。ここでは、潜在連合テスト（IAT）を用いた児童用の自律的SEの測定法（SE-IAT-C）によって自律的SEが測定され、教育前後での自律的SEの上昇が示されている。一方で、教育による他律的SEの変化は直接的には測定されておらず、他律的SEの測定方法の開発と効果検証への適用が研究課題となっていた。

本研究の最終的な目標は、学校教育で盛んに行われているSE教育の諸活動に対して寄与する知見を得ることである。そのため、4つを研究の主目的として研究がおこなわれた。第1に、全体および領域別の他律的SEの尺度作成を行い、信頼性と妥当性の検討を行うこと。第2に、他律的SEと健康・適応指標との関連を検討すること。第3に、他律的SEを低減し、自律的SEを高める教育プログラムの開発を行うこと。第4に、作成した教育プログラムの教育効果を、自律的SEと他律的SEの両側面から検討を行うことである。

研究1と研究2では、他律的SEの全体的な特徴を捉える尺度の作成を行った。研究1では共分散構造分析による因子的妥当性および、 α 係数による信頼性の検討が行われた。その結果、全7項目1因子の尺度として、信頼性と妥当性の一部が確認された。研究2では、担任教員による児童ノミネートとの基準関連から妥当性の検討を行った。担任には、他律的SEが高い児童の特徴を示し、その特徴に最も当てはまる児童と当てはまらない児童を選出してもらった。その結果、他律的SEの特徴に当てはまるとノミネートされた児童は、当てはまらなるとノミネートされた児童よりも尺度得点が有意に高く、妥当性の一部が確認された。

研究3と研究4では、コンピテンス領域（勉強、運動、芸術・技術）に着目した領域別の他律的SE尺度の作成を行った。研究3では、再検査および α 係数による信頼性の検討を行い、各領域の尺度において信頼性の一部が確認された。研究4では、担任教員による児童ノミネートとの基準関連によって妥当性の検討を行った。担任教員には、他律的SEが高い児童の特徴を示し、各領域でその特徴に当てはまる児童と当てはまらない児童をノミネートしてもらった。その結果、各領域で他律的SEの特徴に当てはまるとノミネートされた児童は、当てはまらなるとノミネートされた児童よりも有意に尺度得点が高いことが確認され、3領域それぞれの尺度で妥当性の一部が確認された。

研究5と研究6では、健康・適応指標としてストレスに着目し、全体および領域別の他律的SEがストレスに及ぼす影響を検討した。横断的に検討を行った結果（研究5）、人間関係や失敗に対するストレスへの有意な正の影響がみられた一方で、評価を受けることや人前での発表に対するストレスには有意な負の影響がみられ、他律的SEはストレスを高める一方で、別のストレスを低める可能性が示唆された。研究6では、2回の調査から短期予測的検討を行った。その結果、研究5でみられた有意な負の影響は消失し、他律的SEのストレスに対する影響はいずれも正の影響が示された。このことから、他律的SEは将来的なストレスを高めることが示唆されており、健康・適応を阻害する要因となっていることが示された。

研究7では、TOP SELFの理論と教育方法を基に他律的SEを低減し、自律的SEを育成する予防教育プログラムの開発を行った。学校教員の実施容易性も考慮した作成が行われた。研究8では作成した教育プログラム実施前後に自律的SEと他律的SEの測定を行い、教育の効果検証を行った。その結果、自律的SEの有意な上昇と他律的SEの有意な低減がみられ、一定の教育の効果が示された。

考察をまとめた14章では、自律および他律的SEの測定法の学校教育への導入やSE教育への警鐘、測定法や教育方法の課題と限界について考察された。展望をまとめた第15章では、自律的SEの育成教育プログラムの発展可能性と、学校教育への適用、教育プログラムの実施者育成の展開についての視座が提示された。